

老人のリハビリテーション <改訂第2版>

福井 圀 彦 著 七沢病院副院長

東京都心身障害者福祉センター

原 田 政 美

リハビリテーションには、常にリスクが伴う。もしリスクが伴わないならば、リハには医学としての側面が不必要であるし、理学療法士のような医系専門職員も必要としない。またリハは、回復困難な障害を相手にするものであって「麻痺をなおす」というような夢物語とは違うのである。ところが最近、訓練で麻痺をなおすのがリハであるとか、しろうとでもリハはできるというリスク無視論など、リハ医学の科学性を疑わせるような議論を耳にする。このあたりで、本当のリハとは何であるかを明記した著書の刊行が待望される。

福井圀彦博士の「老人のリハビリテーション」は、5年前に初版されたものであるが、今回大きく改訂された第2版が刊行されたので一読してみると、上記の期待に見事に応えた名著であるとの感を深くする。

もともと老人のリハにおいては、原因疾患である老人病の予後不良の問題、さらにはその根底にあって絶え間なく進行する老化の問題が重く

のしかかってくるので、不用意に訓練を強行すると大変なことになるし、またそんなに成果があがるはずはないのである。本書は全本文240頁のうちの約半分を、老化や老人性疾患に関する最新の情報で埋め、リスク管理の重要性が強調されている。老人のリハにこのような知識が不可欠であることを、読者に深刻に叩きこんでくれるのである。

一方、本書の重点が、各種疾患に対するリハ訓練の方法論に向けられていることはいうまでもないが、実は、科学的に有効性が立証されている訓練法はきわめて少ない。たとえば老人リハの代表である脳卒中後の片麻痺についてみても、麻痺筋の特性である痙性麻痺への訓練効果は未解明である。ところが現場では、無批判に特定の訓練法が画一的に行われる傾向もみられ、単純な訓練法の紹介は有害無益であるとみななければならない。

その点について本書は、非常に厳しい態度を貫いている。たとえばあゝ種の訓練法が紹介された末尾に、

「効果に対する評価はまちまちであり、医師の中でもその効果を信じているものは意外に少ない」というような記述がある。また「われわれのなしうることは運命づけられたゴールまで……、挫折したり、低迷しないように導くこと」というような記述もあって、訓練に対する正しい認識を読者に与えてくれる点は、他書にその類をみないものといえよう。

老人のリハは、患者本人だけを相手にしたのでは、成果があがらないし、病院内の訓練で終わったのでは意味がない。本書ではとくに、家族の心得・指導についての章があり、老人の社会的リハビリテーションと老人福祉行政というような章も設けられている。家庭や社会の中で、病院リハの成果をいかに生かしていくか——その強調で本書は完結している。リハを病院や施設内で終らすべきでないとする著者の念願が、強く感得されるのである。

(B 5, 頁 260, 図 39, 写真 2, 1980. ¥ 3,700, 〒 200. 医学書院 刊)